

12 明治三十七、八年戦役「熊本予備

病院外科治験記事」に就いて

田代逸郎

「記事」巻頭に、第六師団（熊本市）が初めて靴痕を遼東の野に印したのは明治三十七年六月十三日（南山激戦後）で、先頭部隊が得利寺戦役に参加したときである。以後、蓋平、大石橋、海城、鞍山店などの諸戦に参加し、更に、遼陽、沙河の戦役、沙河対陣中の奉天戦では鉄道線路附近に在るなど、常に軍の中堅となつて、毎戦、奮戦、健闘し、大いに勇名を発揚した。

同時に、犠牲も亦頗る多し。加うるに、第六師団内に臨時増設された諸師団所属諸隊の戦傷者をみると、その数はいよいよ多し。と激戦を説いている。

明治三十七年五月十九日より、明治三十九年三月三十一日に至る二十有三箇月間熊本予備病院が開設され、この間の收容患者総数は二万九千三百九十二名であり、約

三分の一に相当の一万一千二百七名は外科患者である。

外科患者を更に分類、計上すると、戦傷六千四百五十七名、外傷五百二十八名、外科平病一千四百十九名、花柳病一千百九十八名、外被四百一名、眼科七百九名、耳科九十五名となる。今回は外科患者の筆頭たる戦傷六千四百五十七名を更に追究したい。

「戦傷六千四百五十七名の追究」

一、敵軍の武器

一八九一年式五連発歩兵銃、一九〇〇年式速射砲、重砲（新式？）、コサック軍はコサック銃、刀、及び、槍などである。

二、戦傷者の隊号別

最多数を占むるは歩兵第二十三連隊（二千六百二名、二十四・八％）で、次いで、歩兵第四十八連隊（二千四百六十三名、二十二・六％）、歩兵第十三連隊（二千二百十二名、十八・九％）、歩兵第四十五連隊（一千四十六名、十六・二％）が相次いだ。

三、戦傷者の階級別

将官〇名、佐官五名、尉官一百三十一名、准士官二十

七名、下士官四百三十名、兵卒五千八百三十九名、軍医三名、看護長一名、看護手九名、主計一名、軍属十一名、計六千四百五十七名

四、戦傷者の兵種別

歩兵六千四十七名、騎兵三十七名、砲兵百三十一名、工兵百七十八名、輜重兵三十九名、衛生部十三名、經理部一名、軍属十一名、計六千四百五十七名

五、戦傷者の出身県別

宮崎二千十四名、熊本九百四十四名、福岡七百九十一名、鹿児島五百九十四名、大分三百二十六名、佐賀七十一名、長崎二十三名、沖縄六名、徳島三名、和歌山、愛知二名、山口、東京、石川、広島、新潟、三重、山形の各県一名

六、戦傷者の傷別と負傷地

傷別・銃創五千五百八十名、砲創八百五十一名、刀創十六名、爆傷八名、其他二名

負傷地・首山堡附近の一千四百十三名を最多とし、沙河附近一千二百十五名、按木屯一千一百三十一名、遼陽附近三百四十四名、奉天附近三百十九名、乾河子二百九

十八名、娘子街一百九十七名などがつづく。

七、戦傷者負傷当時の対敵距離

収容時の聞き取り、病床日誌より記録。

全て目測によるもので、銃創では最遠距離四千五百米、

砲創では最遠距離六千米、最近距離五米である。

八、戦傷者の負傷部位

大腿部八百四十三名、手部八百八名、上膊部五百八十一名、胸部五百三十六名、下腿部五百二十一名、前膊部五百一十一名、顔面部四百六十九名、頭部四百五十六名

九、戦傷者の転帰

治癒四千二百七十一名、死亡二十八名、除役千三百七十七名、事故二百六十六名、後遺五名、合計六千四百五十七名

今回は（八、戦傷者の負傷部位）の内、頭部四百五十六名の展望をのべたい。